

新連載

湖面の光 湖水の命

＜物語＞世紀の水の大事業 ～琵琶湖総合開発†～

高崎 哲郎 (作家)

琵琶湖諸元
 集水域 3,174km²
 面積 670.25km²
 周り 235.20km
 水量 275 億 m³
 最深部 103.58m
 平均深さ 41.20m

第1話「＜序章＞^{プロローグ}「戦場」を乗り越えて
 ～25年・1兆9000億円の大型プロジェクト、終幕を迎える～」

早春の琵琶湖は、やわらかな風が鏡のような湖面をわたり、波浪があたかも深呼吸を繰り返すように緩やかにうねっている。西の比良山系や東の伊吹山系の山腹に、まだら模様になって残っていた純白の根雪も溶け始めている。三角帽子のような三上山（近江富士）はおぼろにかすんでいる。湖岸の桜並木は開花待ち遠しいかのようにつぼみをふくらませ、湖南の早咲きの桜は満開である。



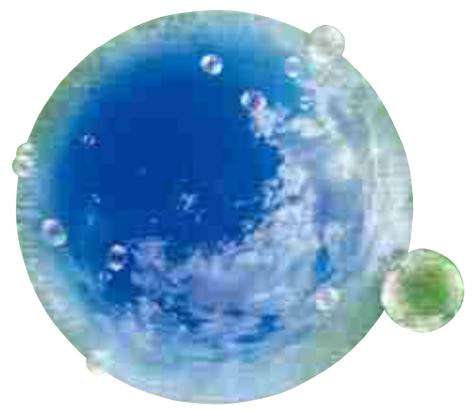
琵琶湖畔、海津大崎の桜（水資源機構資料）

平成4年（1992）3月14日は土曜日であった。花曇りのような穏やかな日和となった。この日午後2時か

ら、琵琶湖の湖岸に面した大津プリンスホテルの大ホールを会場に、「琵琶湖開発事業説明会」が開催される。「説明会」は水資源開発公団（現（独）水資源機構）独自の主催で挙行されるのである。参加者は、工事に携わった公団の職員と職員OBに限られていた。身内だけの完成祝賀会であることから「事業説明会」と銘打ったのであった。それは「戦場」を乗り越えた戦士たちの集い。最後の時間との激戦を闘い抜いた職員の「戦勝祝勝会」にも似た会合であった。OBも含め540人が参加の意向を示した。

琵琶湖総合開発事業は、滋賀県が県内の市町村や関係府県と調整して当初10年の工期で計画案を作成し、政府によって決定されたもので、そのうち主要な「琵琶湖開発事業」については水資源開発公団が工事を実施した。その後2度の工期延長をし、25年（四半世紀）をかけた総事業費1兆8635億6000万円を費やして挑んだ空前の＜世紀の大プロジェクト＞であった。この間事業の中止を求める訴訟（「びわ湖訴訟」）も提起された。年度末のこの3月31日で超ロングランとなった琵琶湖総合開発事業のうち、基幹事業である「琵琶湖開発事業」に一足先に終止符が打たれるのである。最終局面を迎えた大事業は、100人を超える職員の総合戦力

† 国と上下流の府県など関係機関が25年をかけて①琵琶湖の水質と自然環境の保全を図り②洪水・渇水被害の軽減③水資源開発④琵琶湖流域の地域開発を実現した約1兆9,000億円の大プロジェクト



による夜を日に継ぐ作業で大方完了した。だが一部の工事や手続きは、山場は越えたものの綱渡りのような業務が続いていた。残された時間は2週間余りである。

「事業説明会」を企画したのは、同公団琵琶湖開発事業建設部長永末博幸である。3月末の完成を目指して懸命の努力を続けてきた職場の仲間は竣功式を待たずに全国に散っていく。しかも秋にも予定されている竣功式（完成式）に出席出来るかどうかも不明であった。琵琶湖開発事業の竣功式に招待すべき関係者は公団職員を除いても2000人は下らない。滋賀県内には2000人も受け入れる会場はなかった。そんなことを考えると、建設部長永末は3月末までには、是が非でも仲間だけの竣功式を開きたかった。それが第8代で最後の建設部長の責務であると考えた。本社の担当理事に内密に相談したところ、建設省（現国土交通省）や地元滋賀県などに気遣って「止めておけ」との判断だった。滋賀県は「公団事業3月末終了」を認めていなかった。このため建設省近畿地方建設局（以下近畿地建）は日夜滋賀県当局と最終折衝を続けていた。国と県との厳しいしのぎ合いを考えると、内輪だけとはいえ竣功式を開きたいとはとても口に出せる状況ではなかった。

だが公団が事業を継承してから20年、4月から管理段階に入ることになるというのに、何もしないで終わるとは、建設部長永末には耐えがたかった。

「何らかのけじめを付けたい。最後の部長として先輩や同僚らに心からお礼をいいたい」

そこで永末はあるアイデアを思いついた。琵琶湖事業に携わった職員らにより「びわ湖会」が平成元年（1989）に発足したが、その第2回総会を「事業説明会」と称して仲間だけの竣功式にしたいと考えた。建設省や滋賀県には伝えずに内々に準備をしたのであった。この間、肝を冷やすような波乱も続いた。



「えらいことになった。滋賀県農林部が公団事業の3月末完成に同意しないといっている」

3月半ば、同公団琵琶湖開発事業建設部長永末は、近畿地建河川部長紀陸富信から緊急の電話連絡を受け

た。「懸案の水利権のことらしい」と読んだ永末は、早速大津市内の県庁に足を運んだ。農林部では部長豊田卓司を中心に打合せ中であった。部長豊田は永末を見るなり、つかつかと寄ってきた。

「琵琶湖開発による下流府県の水利権は4月1日に交付するらしいが、滋賀県内の農水水利権は認められないと建設省河川局は言っている。そういうことになれば、県としては公団事業の3月末完成は認められない。私（農林部長豊田）はこの3月末で退職することになっているが、これでは辞めるに辞められない、公団も応援して欲しい」

部長豊田の顔は青ざめ悲壮感が漂っていた。永末には青天の霹靂であった。公団としては、3月末での事業完成が滋賀県側に了解されないとしたら、これまで積み重ねてきた血を吐くような努力がすべて水泡に帰すことになる。近畿地建もまた同様の衝撃を受けることになる。

公団事業の平成3年度末（4年3月末）完成を滋賀県が了承できるよう、建設省首脳部は滋賀県の要望を聞き、問題点すべてを克服し得る積りでいた。そこに、突然の予期せぬ大問題の発生である。永末は、滋賀県当局も公団事業完成を認知するにあたっての課題として見落としていたのではないかと疑念を抱いた。

農業水利権問題は、10年以上も前から建設省と農水省との間で、慣行農水水利権の法定化にあたっての論争が続いた。全国的な問題として解決の見通しが立っていなかった。いわゆる「総量表示」の問題である。当時全国的な水不足が蔓延化し、ダム建設による水源手当など緊急を要する課題が山積していた。しかしダム計画における難問は慣行水利権で処理されていた農業用水にあった。農業用水の取り扱い如何では建設省のダム計画は成り立たなかった。河川管理者（建設省）としての立場は、農業用水の取水実態は降雨の時には取水しなくてもよいとの特徴があるため、瞬間の最大値表示だけでは水利権内容が明確ではない。従って、最大値表示の他、農業用水として必要な年間取水量の総量を表示すべきであり、表示しない水利権は認められないという河川管理者の方針が示された。

これに対し農水省は、農水は単に稲の生育のためだ

第1話「<序章>「戦場」を乗り越えて～25年・1兆9000億円の大型プロジェクト、終幕を迎える～」

けではなく、永年に亘り地域の生活に密着した用水として成熟している。総量表示ではこれら用水に支障を来すので納得できないと主張し、折り合いのつかないまま時間が経過していた。琵琶湖周辺の農業用水についても同様であった。この際「総量表示」なしで認めよということである。

実は、この問題に対する近畿地建の意向としては、以前から琵琶湖周辺の水は農業用水として使用しても必ず琵琶湖に戻ってくるという他の地域とは違う特異性を持っているので、琵琶湖周辺に限っては原則として「総量表示」はしなくても良いのではないかと本省に主張していた。だが本省が認めないので、県には「総量表示」が必要だと突っぱねていた経緯もあった。この問題が急遽浮上したのである。

公団としては、解決しようのない問題である。ただただ両者のパイプ役的立場と3月末完成の方向で解決して欲しいという立場をとるしかなかった。

永末は、大阪市官庁街の近畿地建へ出向く車中、電話で問題の早期解決を河川部長紀陸に願い近畿地建に急いだ。

彼が河川部長室に入ったときには午後5時を回っていた。「いやーよかった。解決したよ」

部長紀陸は永末の姿を見るなり、満面の笑顔で話しかけてきた。

「取りあえず乾杯しよう」

紀陸は部下に缶ビール2本を持ってこさせ、紀陸と永末は二人だけで声を張り上げて乾杯した。その後の情報で、建設省河川局は当初結論を出し渋ったことが分かった。下流水利権交付と同じ日に滋賀県内水利についても水利権を交付するという早期決着に踏み込んだ背景には、近畿地建局長定道成美と河川局長近藤徹（元水資源機構理事長・元公団総裁）との電話協議の結果、河川局長近藤から「速やかな解決策を求めろ」との英断があったことが分かった。公団としては満足がいく解決であり、永末は胸をなでおろした。後日、永末が県庁に出かけると、部長豊田は退職辞令を持って笑顔を作りながら挨拶回りをしていた。

◇

事業説明会の壇上高く、「琵琶湖開発事業説明会」

の横断幕とともに国旗（日の丸）と水資源開発公団の社旗が掲げられ、壇上には金色に輝く屏風が配置された。「事業説明会」は、定刻通り午後2時から元建設部次長小川幸雄（事務職）の司会で始まり「皆様お一人お一人が琵琶湖開発の歴史である」と語りかけた。次いで職務中に過労などで倒れ他界した元同僚8人の死を悼んで全員起立し会場の照明を暗くして1分間の黙とうがささげられた。「びわ湖会」総会の議事があった後、次長森田明（事務職）から事業説明会を開催することになった経緯が紹介された。続いて副総裁鴻巣健治と関西支社長植村忠嗣が入場して事業説明会となった。

まず水資源開発公団総裁川本正知に代わって副総裁鴻巣が表彰状を読み上げた。

「表彰状

琵琶湖開発事業建設部殿
右は琵琶湖開発事業の施行に当り
職員一同一致協力し長年にわたり
幾多の困難を克服して工事の推進
に努力し所期の目的を達成しました
よってここにその業績をたたえ
表彰します

平成四年三月十四日

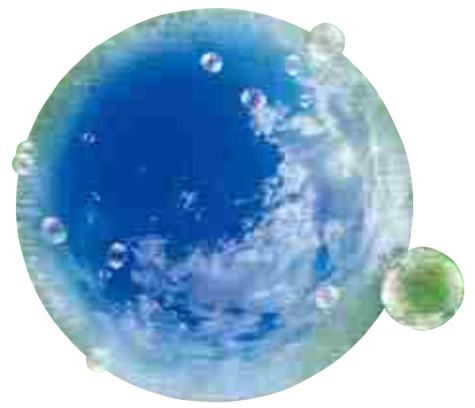
水資源開発公団

総裁 川本正知@」



表彰状（水資源開発公団（当時）刊『さざなみ』より）

表彰状が部長永末博幸に授与された。彼は表彰状を会場に向けて高く掲げた。会場から万雷の拍手が沸き起こった。永末の眼に光るものがあった。



副総裁鴻巣は挨拶のなかで、「筆舌に尽くし難い苦労と努力に対して心から感謝したい」とねぎらいの言葉を述べた後、大事業における「一期一会」の重要性を強調した。そして舟橋聖一『花の生涯』(大老井伊直弼^{すけ}、<付録>参照)から文章を引用した。直弼が桜田門外の変で暗殺される雪の朝に茶室で独り時を過ごす情景を語り、「(直弼の) 一期一会はその著『茶湯一会集』に詳しい。曰く『そもそも茶の湯の交会是、一期一会と云いて、たとえば幾度、おなじ主客と交會するとも、今日の会に、ふたたびかえらざる事を思えば、実に我が一世一度の会^えなり。去るにより、主人は万事に、心を配り、聊かも粗末なきよう、深切、実意を尽し、客にも、此の会に、又逢いがたきをことをわきまえ、亭主の趣向は一つもおろそかならぬを感心し、実意を以て、交るべきなり。これを一期一会という……』(原文のママ)」

会場は静寂な雰囲気包まれた。建設部長永末博幸が建設部を代表して挨拶した。「琵琶湖建設部の事務所がある皇子山^{おうじやま}の早咲きの桜・ハツミヨザクラはいま満開です。今日はまた湖国の春を告げる<琵琶湖開き>の日でもあります。この佳き日に副総裁をお迎えし、表彰状を頂いたことは我々現場で働く職員にとって望外の幸せであります。公団の事業完成を祝い表彰状を頂くのは公団始まって以来のことと感激しております……」

永末は胸に込みあげる熱塊を抑えるように言葉を区切って語った。次いで琵琶湖開発事業経過報告が建設

部次長福間敏夫(技術職)によって行われた。

ここで参加者の多くが予想しなかったことが起きた。滋賀県知事稲葉稔からのメッセージが建設部次長森田明(事務職)から披露されたのである。知事自身は自ら出席してメッセージを朗読したいと願った。だが「事業説明会」は公団職員やOBのみの会合にしたとの公団の意向を受けて出席を断念したのであった。県庁生え抜きの老練な知事は、公団に出向している滋賀県職員から「事業説明会」開催の情報を得たのだった。

「昭和48年3月に、水資源開発公団が建設省から琵琶湖開発事業を継承されてから20年の歳月を経て、ここに事業が概成^{がいせい}したことを心からお喜び申し上げます。

山地におけるダム開発とは異なり、湖のまわりに百万余の県民が琵琶湖と密接な関係を保ちながら生活をしている訳でありますから、琵琶湖が未だ経験したことの無い水位変動を伴う水資源開発でありますだけに、本工事や補償対策の実施に当たり、さぞ御苦勞いただいたことと存じます。

全国から選抜された皆さんが、ここ大津に結集されて琵琶湖開発事業建設部を設置し、この日本の湖の開発に取り組まれることになった時、“びわ湖とは何ぞや”というところまで議論がなされ、琵琶湖開発事業施行の基本方針が策定された当時の話を思い出し琵琶湖総合開発20年の感慨^{ひとしお}一入であります」

「去る1月30日、代表的施設である湖岸堤管理用道路の完成式に出席いたしました。立派に完成した湖岸堤により、長年、洪水や浸水被害を受けてきた琵琶湖周辺住民の悩みが解消されることになりましたし、湖岸に明るく開かれた道路によって大変便利になりました。そして何より、琵琶湖が我々県民にとって、より身近なものになったことは、確かであります。

増加維持管理費等、補償対策の面で一部仕事が残っているようですが、これら琵琶湖開発

好におられる皆様のお集まりの場、千代子
 様にお祈りいたします。どうぞこの
 湖岸、雄文、美しい琵琶湖をいつまでも忘れ
 ないよう祈ります。よろしくお願いいたします。
 永末博幸の御挨拶の御挨拶、御
 音聲に拜し、改めて深い敬意を表します。皆
 様永末の御挨拶を拝見しました。
 平成四年三月十四日
 滋賀県知事 稲葉 稔

滋賀県稲葉知事のメッセージ(最終部分、永末博幸氏提供)

第1話「<序章>「^{プロローグ}戦場」を乗り越えて ～25年・1兆9000億円の大型プロジェクト、終幕を迎える～」

事業の結晶を、地域整備事業をやり遂げることによって、琵琶湖総合開発の所期の目的達成に繋げていきたいと決意を新たにしております。

と同時に、母なる湖である琵琶湖を、琵琶湖らしさにあふれ、うるおいとやすらぎが感じられる琵琶湖にするためにはどうしたらよいか、そのあり方を求め、可能なものから実施していきたいと考えております。

お聞きするところによりますと、現在建設部におられる皆様の半分近くの方が、それぞれ各地の職場へ転じられるそうですが、御健勝をお祈りいたしますとともに、どうかこの湖国、雄大で美しい琵琶湖をいつまでも忘れないようにしていただきたいと思っております。

本日お集まりの皆様方の多大の御努力、御苦勞に対し、改めて深い敬意を表します。皆様本当に御苦勞さまでした。

平成4年3月14日

滋賀県知事 稲葉 稔

代読する次長森田は感激が胸に込み上げ時々言葉を詰まらせた。事業続行を強く求める滋賀県側の姿勢に接している部長永末ら琵琶湖開発事業建設部の職員は、万感胸に迫り涙を流さない者はなかった。会場からすすり泣きが聞こえた。

「説明会」は、壇上の3つの酒樽の鏡割りに続いて、



琵琶湖開発事業説明会(大津プリンスホテル、水資源開発公団(当時)刊『さざなみ』より)

参加者全員による「乾杯！」の大唱和が大ホールに響いた。さらに参加者全員で「琵琶湖周航の歌」(小口太郎作詞、吉田千秋作曲)を大合唱し、宴はたけなわとなった。

♪一、われは湖の子 さすらいの
旅にしあれば しみじみと
昇る狭霧や さぎなみの
志賀の都よ いざさらば
二、松は緑に 砂白き
雄松が里の 乙女子は
赤い椿の 森陰に
はかない恋に 泣くとかや……♪

参加者全員がこれまでの苦勞が吹き飛ぶ思いだった。事業説明会は最後に万歳三唱をして閉会となった。琵琶湖の湖面は夕日に輝いていた。



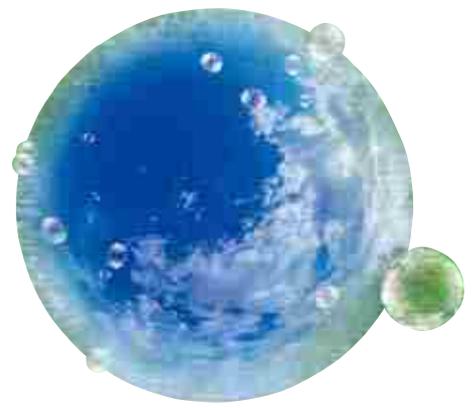
10日後の3月24日朝、大阪府知事の中川和雄は水資源監(水資源担当最高幹部)大槻均おおつきひとしに同行を求めて公用車で滋賀県庁に向かった。大阪府庁内には、知事は母方の墓参りに滋賀県に出向くと伝えておいたが、それはカモフラージュであった。

滋賀県庁3階の知事室には、知事稲葉稔と県議会議長らが待っていた。

「もう比叡おろしは吹きましたか」

中川は知事室に入るなり笑顔を作って語りかけた。「いやあ、まだですよ。もうちょっと経てば吹くでしょうね」

普段は笑顔を見せない稲葉も表情をほころばせて応じ、県議会議長らも笑みをもらした。下流の大阪府・兵庫県と上流(水源地)の滋賀県の水利権をめぐる長年の対立は一応解決し、新年度がスタートする4月1日より琵琶湖から新規利水供給の開始(毎秒40立方メートル、「水出し」とも呼ばれる)がなされ、正式に安定的な水利権が付与されることになった。(毎秒40立方メートルの利水供給は国内では破格の水量だった)。



(参考文献：『淡海よ 永遠に』(建設省(現国交省)琵琶湖工事事務所、水資源開発公団(現水資源機構)琵琶湖開発事業建設部)、『淀川百年史』(近畿地方建設局)、『滋賀県史 昭和編』、『大阪府の水資源開発』(大阪府水資源総合対策本部)、『水戦争 琵琶湖現代史』(池見哲司)、永末博幸氏資料、大槻均氏資料、清水昭邦氏資料、京都新聞関連記事など)

<付録>我が歴史・文学そぞろ歩き～琵琶湖編～

琵琶湖畔を歩いている時、最初に思い出された文学作品は舟橋聖一『花の生涯』(新潮文庫)である。幕末の大老井伊直弼の生涯を描いた浩瀚な歴史小説である。万延元年(1860)3月3日、大老直弼が暗殺(桜田門外の変)される節句(雛祭り)の日。大雪となった早朝の登城前の大老の姿はしんと降り雪のように心にしみわたる。「水戸浪士が命を狙っている」。直弼の元には情報が相次いでもたらされている。暗殺による横死をも覚悟した45歳の大老の心境は清澄であった。青年時代まで過ごした郷里彦根の城から眺めた春の琵琶の湖がまぶたに浮かぶ。



彦根城(現在、筆者撮影)

「直弼は(江戸城桜田門に近い彦根藩邸の)居間に戻った。そして、文机の上の、画伯狩野永岳の描く画像に暫く見入った。

それから、硯の蓋をあけて、
近江の海
磯うつ浪のいくたびか

御世に心を
くだきぬるかな

と、自讃した。

このとき、直弼は、もう一首詠んで、或る人の囁に依る掛地の讃とした。即ち、

さきがけし 猛き心の
花ふさは
散りてぞ いとど香に
匂ひける

俗に言う虫が知らせたとでも言うのか、恰もその日の遭難を予知する如くであるために、却って、この歌のほうが、人の口の端に伝えられた。(中略)

直弼は書院の間へ端坐して、鼓を取るなり、つとめて静かに、そしておもむろに、打ちはじめた。

シテサシ

〽

面白や

頃は弥生の半ばなれば
波もうららに 海のおも
ツレ

〽

霞みわたれる 朝ぼらけ

シテ

〽

のどかに通ふ 船の道

いかように心騒ぐ日とて ここらまで謡ってくる
と、精神が静まってくるのに、今日はいっかな、胸の
浪が高く喘ぐのをとどめる術がなかった。

暫く、鼓のみ打っていた。それからまた、謡い出した。

〽

浦にへだて行く程に
竹生島も見えたりや

漸く落ち着いて来た」。 (つづく)。